The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	松山先生を憶ふ
Author(s)	音代, 節雄
Citation	懐徳. 1927, 6, p. 109-110
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/88773
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

松山先生を憶ふ

音代節雄

懷德堂は近年大厄に遇つてゐる。曩には、西村博士の逝去があつて、まだ悲しみが消えぬまに、永田理事長は議會開院中東京に於て突として逝かれ今まだ、松山教授は長日にわたる惱の後不歸の客となられた。

もうかれこれ七年程前の事である。懷德堂といふものを知らなかつた自分は、或る日曜の朝、商品陳列所の構内を散策してゐた。氣候は秋だつたとおもう。開かれてゐる窓の外から目にとまつたのは、紋附姿の講師であつた。後から思ふと、これは論語朝講であつたのだ。それが松山先生であつたことに違はない。是か最初の松山先生の印象であつた。

後間もなく懷德堂に入つた時、先生は大學衍義、近思錄、輶軒語を講ぜられてゐた、漢學に殆んど智識のなかつた自分は、別天地へ來た樣であつたが、追々とわかつて來る。吾々晝働いてゐるものにとつて、夜間はともすれば疲勞が出て、近思錄などは時々ねむけを催すこともあつた。併し但一つ淸々しき氣持で講義を聽く事の出來たのは、日曜の朝講である。朝の一時間の講義は、身心を爽快にして、先生の講義に傾聽してゐると、自ら冥想に耽けるのである。一週のうちで、夜晝を通じて自分の心を最も落付かしめて、純眞澄透せしむるものは、此日曜朝講の一時間である。好んで此日は枚方から出掛け

たのであつたが、今はもう先生の悠容たる講義振りを見られなくなつてしまつたのも悲しい。人格識見共に間然するところなき先生温厚其物の如き先生孜々として研究に沒頭された先生、懷德堂の發達に終始盡された先生、今やなし。先生を慕ふ心は甚だ切である。せめて博士論文北宋五子哲學の速かに公刊される日を待ちたい。

松山先生の大なる賜

小松熊之助

日曜朝講後正午迄の學習は小生が頗利益を受けたと信じて居る、初小生は松山先生から道をこそ聞け、知らぬ字を敎へて戴くなどとはあまり期待すべきことゝも思はなかつたが、然し小生の訓詁癖と質問病とはいつのまにか先生を字引敎師のやうに待遇しだした、先生の寬大なる之に對して少しも御厭ひなく、寺小屋の師匠が『いろは』を敎へるにも增した御面倒を御覽下さつたのである、此無遠慮は定日講義の筵に於てもそうであつたが、主に上記日曜朝講後の學習に於て行はれた、御蔭樣で多少讀書力が付いた樣な氣がしはじめると、少し書物を讀んで見る氣が起り、書物を少し手に掛けると道を知るに於て多少の利益はあつたと確信する、小生が先生より受けたる大なる賜といふのは此『字を敎はつたこと』である、固より先生の全人格的御敎育を受けることによりて大に益する所があつたことは今更言ふまでもないことであるが、先生が字引敎師に爲つて